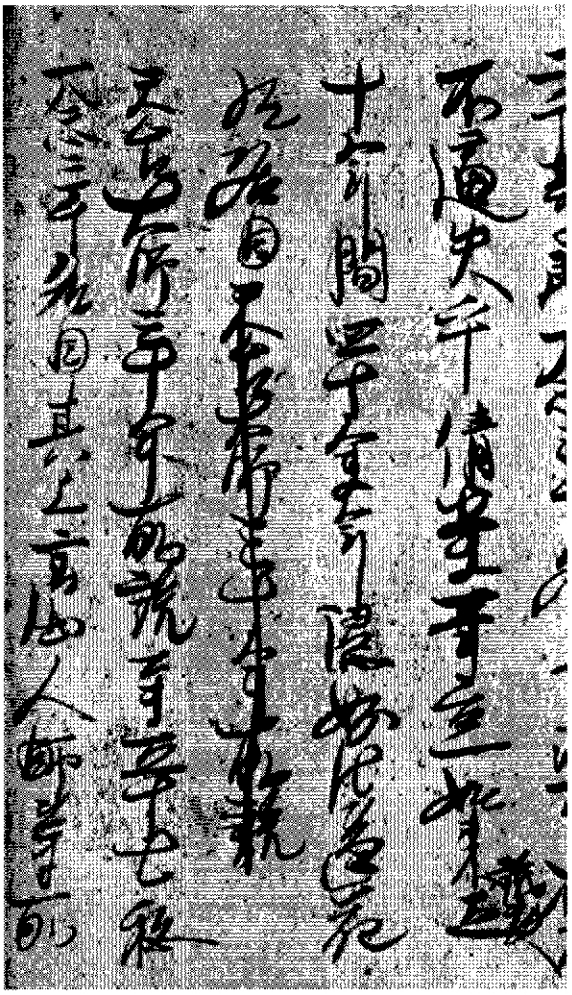
今月の御聖訓



（【不遍の失や。】 ［ふへんノ］ 倩 事の意を案ずるに、如来は説教五）

【不遍ノ失ヲ乎。】倩案ズルニ事ノ意ヲ、如来ハ説教五

（十年の間、四十余年には妙法蓮華）

十年ノ間、四十余年ニハ隠シタマフ妙法蓮華

（経の名目を隠したまふ。）

経ノ名目ヲ

（天台大師は三十年の所説、五十七に至るまでは、）

天台大師ハ三十年ノ所説、至ルマデハ、五十七ニ秘セルナリ。

（一念三千の名目を秘せるなり。【其の上、唐土の人師等の所】）

一念三千ノ名目ヲ。【其ノ上、唐土ノ人師等ノ所】

「一念三千名目出処勘文」（定本定本二九八六頁）

目　次

今月の御聖訓

巻頭言……菅野憲道 1

講義講話「一念三千と自己認識」……菅野憲道 2

御書と日興上人〔190〕……松田銘道 8

【山行記】「たかが槍ヶ岳」……森　秀之 10

読書案内『これで暮らす』……松田銘道 15

【紀行】「聖跡巡り〔2〕」……井元恵子 16

……21

八月の行事　葉月詠草　恵日俳壇　訃報

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　題字：立正安国論より拝写

巻頭言

墓場の会話

菅野憲道

お寺のお盆は忙しい。夏の盛りの盆前は草取り、掃除や塔婆書き、法要準備に檀家周りでみな汗だくだ。とりわけ掃除草取りは修行の基本。修利槃特の故事を引くまでもない、掃除の効果は心の塵を払うことにも通じ、精神衛生上もその効果は大だ。

小生も小僧の頃から草取りとの縁は切れたことがない。雑草を抜きながら、きまって思い出すのは、その昔、故老僧のひとこと「心にはびこる謗法を抜くつもりでやれよ」なるほど、どんなことでも動機付けが出来ればものごとはスムーズに運ぶもの。それが出来なければ心の方も散乱する。

お寺という所は多少浮世離れしたところがある。その好例が無縁霊状態の納骨で施主遺族行方不明のご遺骨がどこのお寺でもかなりある。最初預けたまま一度もお参りもない御遺骨が気の毒になる。何十年音信不通でも強硬手段を取ることはないが故人もけっして安らかではあるまい。

もう五十数年以前からの預かり御遺骨も行き場もないまま居候で、僅かな冥加料の滞納を気にしてさぞや肩身がせまいだろう。

お墓についても多くは先代、先々代で生前よく存じの方々、つい先年まで毎月お参りを欠かさなかった方には草っ取りしているところに出くわすと、「住職さん自ら草取りとはもったいない、恐縮です。」などと必ず聲を掛けられたものだ。コロナのウイルスの影響の残る昨今、あの主人なら墓所の中から何と話しかけてくるだろうか。

お講講話（要旨）

拝読御書　「一代聖教大意」（全集四〇二頁）

一念三千と自己認識

菅野憲道

《一念三千の出処》

今月は、「一代聖教大意」を通して、一念三千ということについて少々お話をしたいと思います。

「一代聖教大意」の冒頭に、

「問ふて曰く、妙法を一念三千と云ふ事如何」（全集四〇二頁）

とテーマを掲げて、まず妙法蓮華経とは一念三千だといわれ、一念三千について天台大師が法華経を講義するにあたり、

「天台大師此の法門を覚り給ひて後、玄義十巻・文句十巻……」（同）

と説かれておりますように、天台大師五十歳の時にまず「法華文句」を説いて法華経の文々句々について因縁・約教・本迹・観心の四種釈を立てて詳細に解説し、五十六歳にして「〝妙法蓮華経〟とは何ぞや」ということを説くために「法華玄義」を講説し、〝妙法蓮華経〟の順に釈名・顕体・明宗・論用・判教という五つの範疇（カテゴリー）を用いて解説されております。これを五重玄義といい、さらに通釈と別釈があり、とりわけ別釈では〝法〟および〝妙〟の解釈に紙数の三分の二を使い切るほど徹底した講述がなされおります。

ところが一念三千の法門について明かすことはなく、「玄義」、「文句」では十界互具百界千如までしか説かれなかったのです。（「観心本尊抄」）

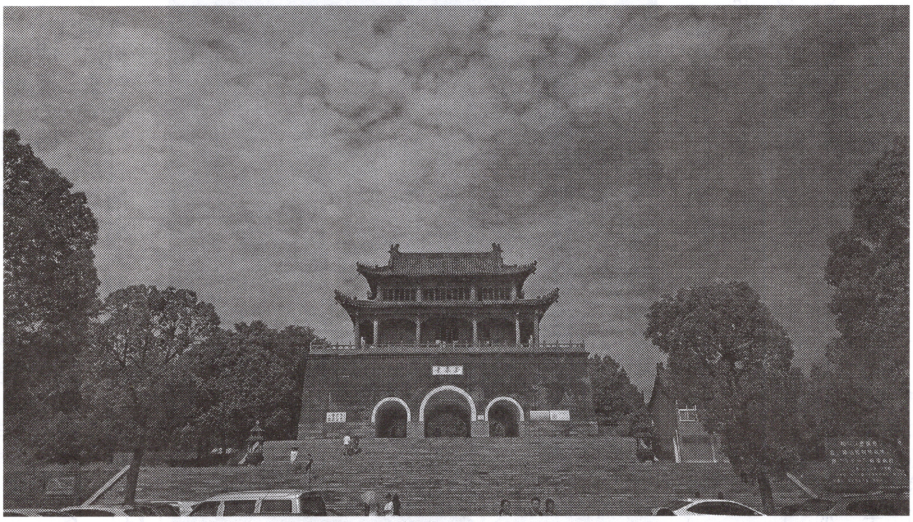
しかしてようやく五十七歳の時に、その実践法として「摩訶止観」を講説しますが　それでも容易に極意の法門を説かないで、その準備段階として心身を調える法などが説かれます。具体的には「摩訶止観」全十巻の内の一巻から四巻まで（＝第十章の内、第一章から第六章まで）は肝心の妙法蓮華経を受持・証得するための行法が説かれることはなく、四種三昧とか、前方便二十五法という方便の行法が説かれているのですが、これを他宗では宗旨の典拠として用いているのですから、的外れと言わざるを得ません。

、第五巻からは、いよいよ「第七章・正しく止観を修す」に入って、まず十境十乗という有名な観察法を用います。十境とは一陰界入、二煩悩、三病患、……と修行を妨げる問題として十

項目をあげます。その一番目の陰入界とは五陰十二入十八界のことで、すなわち我が心身（欲求や思考、感情、身体やこころ）の問題を心識に要約し、心を対象とする十種の観察法をあげます。これを十乗といって一観不思議境、二起慈悲心、三巧安止観……と続きます。この十境十乗の中でも重要になるのは、いうまでもなく我が心やいのちについて不思議なることを深く観察することです。ここで気づくのは「法華玄義」の序でも妙法を釈して「言うところの妙とは、妙は不可思議と名づく」とありますから、通ずるものがあります。そこで、この陰入境の観不思議境の講義の中で、ようやく、

「夫れ一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す。この三千、一念の心に在り。もし心無んば已みなん。介爾も心あればすなわち三千を具す。」（同）

と説かれて　肝心の一念三千の法門を示します。それでは何が不思議かといえば心ほど不思議なものは無い。なぜ不思議なのかといえば心がすべてであって、心にすべてが具わっているからというのです。さらにこの文の下には一念三千の意味を、、



天台大師が摩訶止観を説いた玉泉寺の山門

「もし一心より一切法を生ぜば、これ即ちこれ縦なり。もし心が一時に一切法を含まば、これすなわちこれ横なり。縦もまた不可なり、横もまた不可なり。ただ心はこれ一切法、一切法はこれ心なるなり」（摩訶止観第五巻）

といって、心がすべてを生み出したという発生論の意味でなく（不縦）、心がすべてを含んでいるという内在論の意味でもなく（不横）、心と一切法が能所の関係にあるものでもなく、識の及ぶところでないというのです。心はこれ一切法、一切法はこれ心という不思議な当体全是の一念三千と説かれたのです。

一念三千の不縦不横ということは「月こそ心よ花こそ心よ」（白米一俵御書）という大聖人のご教示の方が分かりやすいかもしれません。

《一念三千は終窮究竟の極説》

ところで、天台大師の教えは、後に妙楽大師によって玄義・文句・止観の三大部を、それぞれ玄義釈籤、文句記、止観輔行弘決として解説されておりまして、この止観第五の一念三千の文を受けて「弘決」には、

「当に知るべし、身土は一念の三千なり、故に成道の時、こ

の本理に称いて一身一念法界に遍し。」（同）

と釈されていて、その理解をたすけております。すなわち身体も国土も二而して不二、たとえば多を一と見る視点と、一を多と見る視点が一心に具わるように、一念に三千種の世間が具わっているということを敷衍して説いたもので、成道の時、すなわち仏の境界に立つとき、仏身は普く法界全体にまで広がっているというものです。

「故に止観の正しく観法を明かすに至りて、並びに三千を以て指南と為す。乃ち是れ終窮究竟の極説なり。故に序の中に説己心中所行法門と云ふ、良とに以有る也」（全集四〇二頁）

と、天台大師の究極の教えが、この止観第五の一念三千の出処の文であると注意を喚起するとともに、最大限の敬意を払っております。これはひとり妙楽大師に止まるものではなく、後世に至ってもこの両文が止観と弘決における最要文として伝えられてきたようです。

日蓮大聖人も、この二つの文を重視されて「観心本尊抄」、「一代聖教大意」等に引用されておりますが、他にも金剛錍の「毘盧の身土は凡下の一念を超えず」といって、広大な華厳教主・毘盧遮那如来の仏身仏土も凡夫の一念を越えるものではない」といって一念三千の理境についての引用などが知られます。

このように、凡夫の一念がそのまま法界の果てにまで広がっているという一念三千とは、どう理解したら良いか考えてみたいと思います、

《自我意識と無我》

まず「自分とは何者か」、自己認識の問題について話したいと思います。現代人の平均的な自我観としては、生物学的身体の成長とともに大脳の働きを媒介にして自我意識が形成される。そこで、主体的な自我を確立することが大事などとされ、教育目標にもなっているようです。

そこで教育でも他に対して自己主張できる児童が優秀であるかのように低学年のうちから議論するような学校もあるようです。現代人の意識は皮膚を境界として相対的に自己と他者を分別しつつ自我を独立した固有の実存と思い、自我の拡大・優越・永続させるために人生があるというような、自己中心的な個人主義が主流ではないかと思います。

そこでは必然的にエゴイズムや、虚無主義に陥りやすい傾向も指摘されますが、彼我、有無の二元論からは他者や社会への

天台大師像

無関心となり、人間関係も希薄で、孤独になりやすいのではないかと思います。

ところで、現代人が神のように大事にする自我意識ですが、少なくとも仏教では、「無我」といって、在するものすべてについて独立した固有の実体などはなく、「無常」すなわちあらゆる存在が不変のものではあり得ず、動的平衡と言われるような一時的な現象に過ぎないというものです。

人は四六時中「オレが、オレが」で生きて、「私が私が」で暮らしているものですが、考えて見れば、いまの自分を支配する自我意識など、いつから住みついているのでしょうか、幼児期や少年期にはあまり無かったように思います。

それも時に正反対の行動をとったり、自損行為に走らせるような自己が現れたりするのですから、自我意識は一つとは限らず種々あって、日々時々刻々変化しております。仏教ではこれを「煩悩」と名付けております。もしこれを警戒せずに、心の赴くままに煩悩に使われるなら、妄想や残虐なことさえしでかしかねません。怠惰な感情に流され続ければ、生きていることさえ面倒になりかねません。また、あまり我の強い人は周囲からも嫌われるものです。

「心の師とはなるとも心を師とせざれ」（「義浄房御書」（全集八九二頁））

「一生空しく過ごして万歳悔ゆること勿れ」（「富木殿御返事」（全集九七〇頁））

とは、大聖人もしばしば戒められているところです。

《我が身は地水火風空》

「三世諸仏総勘文教相廃立」には、

「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして、即座に悟りを開きたまひき」（全集五六八頁）

という御書の一文はよく知られております。法華経寿量品には、釈尊は約二千五百年前にインドで初めて悟りを開いたわけではなく、本当は五百塵点劫の当初という遙か久遠の昔に悟りを開かれたことが明かされます。

その最初一番の開悟の内容について、

「凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして、即座に悟りを開きたまひき」

と表現されていることは注目されます。釈尊の悟りは我が身即地水火風空の五大と不二であり、またそのものであることを悟られた、つまり地・水・火・風・空の異名は妙法蓮華経ですから、それを悟られたというのです。

我われ人間をはじめ自然界のあらゆる生命や存在は、みな地・水・火・風・空という五つの要素の和合によって自然現象として立ち現れるのであって、空気でも水でも、あるいは光とか熱でも、あるいは大地でも、人間も五大と同体のまま存在しているのであり、自我意識のうえでは自然環境と人間とが対立して自然を開発してきたように考えても、けしてそうではありません。

現代社会という人間が人工的に作り上げた環境の中で、人間が作ったルールにしたがって生活していると、人間まで大量生

産の工業製品のような扱いとなり、コスパとかリスクとか規格化・画一化などの物差しで人を数値化する習慣となり、いろいろな意味で非人間的な世界が広がっていく流れになっております。

しかし人々が海に遊び、山に登り、日の出や夕日に心を奪われ、星月に見とれることは、生命の奥底で眼前に展開する大自然の、大宇宙の光景が自身の生命現象と直接的につながっていることを直感的に感じとるからに他なりません。地水火風空のいずれをとっても、これなくしては瞬時も自我は存在し得ないのです。この諸法実相というあたりまえの姿に気づき、受けがたき人身を受け、値い難き仏法に遇う不思議の因縁を思うとき、一念三千の法門も自然に信解できるのではないでしょうか。

「我が身、地・水・火・風・空」であると知って開悟したということと、妙法蓮華経を一念に受持することは、我が身に当てたお題目であり、一念信によってもたらされる世界は我身成道するのみか、その土も常住の浄仏国土となって法界同時の成仏となるという意味になって、成道の時我が身も法界に遍しという法門の要領が分かってくるように思います。

《一念三千の秘密》

ところで、「摩訶止観」には、よく分からないこともあります。それは、一、この講義は途中で終えられ未完の書になっていること。二、一念三千の構成は明確だが、何処にも一念三千の用語が使われていないこと、三、実践方法として示された一念三千や十境十乗の観法も、実際には誰もこれを修した人がいないこと　四、法華経本門への言及が迹門に比較して大幅に少ないことなどがあげられます。これらの疑問は、次の御書に見られるように、教主釈尊から付属を受けたか、否かの相違から生まれたものとも見られるが、これは後日を期したい。

「富木殿入道御返事」には、以下のように記されております。

「止観の十境十乗の観法は天台大師説き給ひて後、行ずる人無し。妙楽・伝教の御時少し行ずといへども、敵人ゆわきゆへにさてすぎぬ。……一念三千の観法に二あり。一には理、二には事なり。天台・伝教等の御時には理なり、今は事なり。観念すでに勝る故に、大難又色まさる。彼れは迹門の一念三千、此れは本門の一念三千なり。天地はるかに殊なりことなりと、御臨終の御時は御心へ有るべく候」（全集九九八頁）

《網の目のように繋がる命―衆生世間》

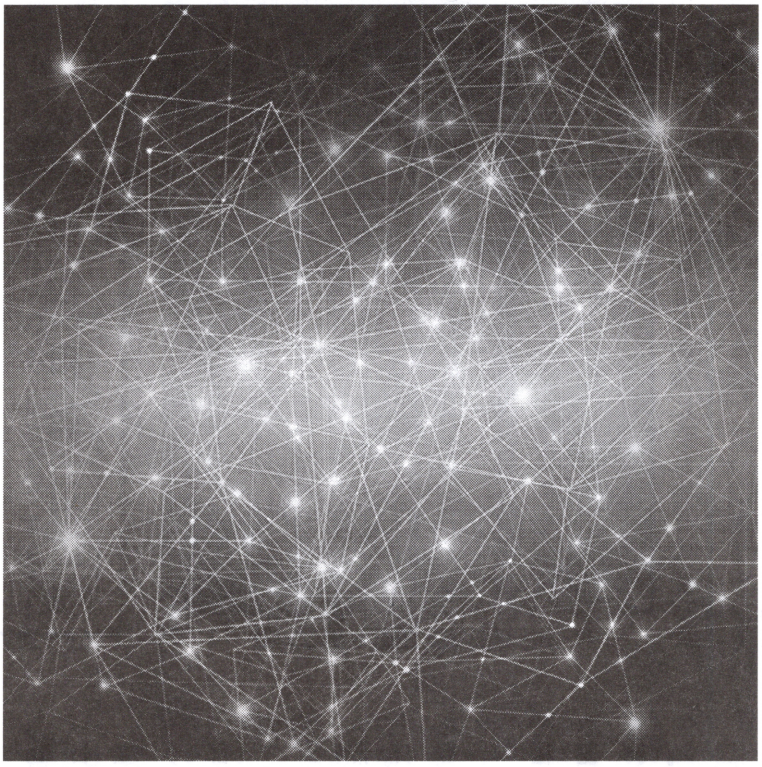
一念三千とは、要するに、我われの身も、住んでいる国土世間も一念も、みな一念三千だといい、そのことは一身三千でもあるし一土三千でもあって、あらゆる法界の因縁、要素が具わっていて、これは網の目に譬えられますが、一つの命だけが孤立してそれ自身で存在するのではなく、必ず網の目のように、無数のいろいろなつながりがあるのです。

このことは、自分の父母を考えると分かりますが、父母がいなければ今の自分は影も形もないのですから、父母と自分は切っても切り離せません。現代人の自己認識では、自分というものが独立した固有の存在であるように思っているのですが、もとは母親一体だったわけです。それが種々の因縁と時間の経過

によって分身として生を受け、二体となったわけですから、二而不二という関係性は眼前のことなのです。そして自分が父母あっての存在だったことを少しでも直視すれば、**「一切衆生は皆父母なり」**（全集一〇四六頁）という自己の存在の在り方（諸法実相）が、自ずから分かってくるのです。

父母には必ず二人ずつ祖父母がおり、四人の祖父母には八人の曾祖父母がいたはずで、更には十六人の高祖父母と、こうして遡っていくと、二十数代で一億人以上の父母がいたことになりまして、その中の一人でも欠けると、今の自分はありえなかったのですから、そのことは我われも一切衆生と繋がっていることを意味しているのです。

人類学や遺伝子解析も進化してきて、およそ三十万年前のアフリカに生まれたひとりのホモサピエンスの黒人が、いまの人類の祖先であるという説が有力だそうです。そこで始まった一つの命の系譜が、現代人にまで続いていることは確かなことだと思います。そればかりでなく、結論的には多様な生命と親戚関係にあるということで、動物や魚とか鳥や、草木や菌類にいたるまで種々の因縁で繋がっているというのです。「法界に遍し」とは、僅かな心の変化でさえ妙法の相、妙法の本質、妙法の体そのもので、まったく一体であるから孤立して無関係に存在するものなど何も無いのです。この一念三千の妙法を受持する境地では生死を超えるのもさほどむずかしい話でも無くなりましょう。その確かな道が説かれているからです。



網の目の繋がり（因陀羅網のイメージ）

「是の如く生死も唯妙法蓮華経の生死なり。天台の止観に云く「起は是れ法性の起、滅は是れ法性の滅」云云。釈迦・多宝の二仏も生死の二法なり。」（「生死一大事血脈鈔」全集一三三七頁）

多くの人は、生に迷い、死に迷い、東西南北に迷って、一生を虚しく過ごし、徒らに人生を終える事になりかねません。その迷いの根本は、たいてい自分とは自分の煩悩であると思っているのです。

法華経の信仰を志すことは、我慢偏執の頑迷な自己から脱却して本来あるはずの大きく広くまっすぐで豊かな、強く清らかな心＝仏心を取り戻すことです。

南無妙法蓮華経

（了）

【御書と日興上人（一九〇）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一二四）

松田銘道

前回は、『本尊問答抄』の法本尊に関する一文について、山上弘道氏と都守基一氏の解釈には、釈迦仏像から曼陀羅本尊への相対化が示されているかどうかの相違があることについてみてきました。

今回は、山上氏と同じく相対化が示されたとの大黒喜道氏の「宗祖教学体系における三大秘法の位置づけについて」（『興風』二十七号、平成二十七年十二月発行）の論文についてみていきます。

大黒氏は、竜口法難以後、『観心本尊抄』等で示される「妙法五字」について、「三大秘法の一つ『本門の題目』という題目修行なのか、それとも釈迦仏像本尊に相対する『大曼陀羅本尊』なのか、という問題である。この妙法蓮華経の題目の五字の含意の多様性は、これまでも論じられていたように思うが、（中略）『法華取要抄』の一段などは、その辺りの整理をしっかり付けない限り、決して筋道の通った理解ができない表現となっている。」

との見解を示しています。ここには、従来の「題目の五字の含意の多様性」について、①三大秘法の一つの題目修行を示す「本門の題目」のことであるのか。②それとも釈迦仏像に相対する曼陀羅本尊を示しているのか。

以上の相違が明確にされてきていない現状を指摘しています。

この指摘は、都守氏の「講演要旨『三大秘法について』」の次の一文からも知れます。

「本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目の三大秘法は、一大秘法たる南無妙法蓮華経より開出されたものとされる。一大秘法の南無妙法蓮華経と三大秘法の本門の題目は、違うともいえるし、同じともいえるであろう。もし同じであるとすれは、『南無妙法蓮華経の題目は三大秘法の中核であり、本尊・戒壇を内包する一大秘法でもある』ということができる。」

都守氏は、①と②が「同じであるとすれば」と仮定した上で「三大秘法」と「一大秘法」の関連を考察しています。しかし、大黒氏は、文永十二年（一二七五）三月十日の『曾谷入道殿許御書』のみ用例がある「一大秘法」との用語について、

「従来、これは……一大秘法から三大秘法が開かれ、同時に三大秘法は一大秘法に収まる等と説明されることが多いが、この逆縁の信仰世界で語られる『一大秘法』が順縁世界に建立される三大秘法中の本門の題目でありうる筈もなく、これはまさしく逆縁世界に弘通されるべき大曼陀羅本尊のことと考えられるのである。」

との見解を示しています。

このように、逆縁と順縁との関連も踏まえ、①の「本門の題目」ではなく、②の「釈迦仏像に相対する曼陀羅本尊」のことと規定してます。

また、『本尊問答抄』の法本尊に関する一文についても、

「『本尊問答抄』では『釈迦を以て本尊とせずして、法華経の題目を本尊とする』ことが表明され、これにその直前に見える𝔞字花押から𝔮字花押への転換や、それ以降に急増する『法華経の御宝前』等という表現を勘合した場合、それを釈迦仏像本尊よりも大曼陀羅本尊をという宗祖の強い気持ちの表れと見ることができよう。」

との見解を示しています。すなわち、

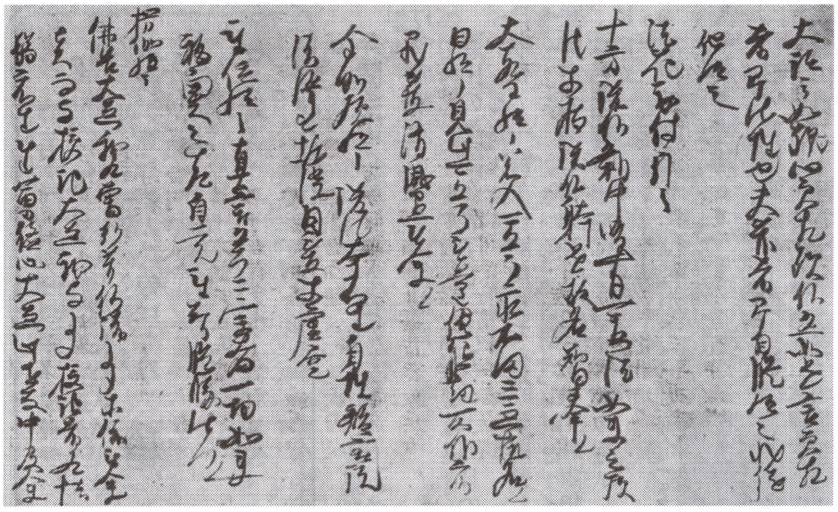
❶弘安元年に「𝔞字花押から𝔮字花押への転換」がみられること。

❷弘安期に「『法華経の御宝前』等という表現」がされていること。

以上の❶の転換と❷の変化から、「法華経の題目」＝「大曼陀羅本尊」と規定しています。❶と❷の状況については山上氏もすでに指摘していますが、大黒氏は❶について、

「変化後の𝔮（ボロン）字花押の『𝔮』字が『一字金輪仏頂尊』との結びつきが強いことに着目し、それに関係する文証を宗祖の近辺に求めた結果、『注法華経』結経第十六紙裏面に見える『法花義付引』の一文に行き当たり、その中に説かれる『諸仏如来を内包し、それらに優先する一乗法（妙法五字）』というイメージこそが、宗祖が『𝔮』字に込められた内容ではなかったか、と推測したのである。そして、そんなイメージをその中に込めた𝔮字花押を、特に大曼陀羅本尊に大きく認められた宗祖の内意は、順縁志向の釈迦仏像本尊を退けて、それを内包し優先する逆縁指向の大曼陀羅本尊中心へと本尊義の転換を計ろうというものではなかったか、と考えたのである。」

と述べています。ここには、「𝔮字花押」の考察に、これまで注視されていなかった『注法華経』に引文の『法華義付引』（詳細不明）の一文についての考察から、「大曼陀羅本尊に大きく認められた内意」は、「釈迦仏像本尊」から「大曼陀羅本尊」へと本尊義の「転換（＝相対化）」、との見解を示しています。



宗祖所持の『法華経』一部八巻と開結二経の合計十巻の表裏の余白に諸経論釈の要文を集録し注記した『注法華経』（三島市・妙法華寺蔵）。『普賢経』の第十六紙裏面には、「法華義付引に云く、十方刹土の中に唯だ一仏乗あり。如来の頂法にて、諸の仏体を等持す。是の故に智拳と名づく 文」の一文が注記されている。

【山行記】

たかが槍ケ岳

大阪地区　森　秀之

今回の山行は、槍ヶ岳から双六岳にかけての縦走という山行計画です。

登山の準備を完了し、六月二十五日の日曜日、午後から前乗りで大阪を出発し、登山口のある新穂高ロープウェイ駐車場に向かって、車を走らせました。

ただ計画通りには行かず、結果的には、天候等を考慮して、

【初日】新穂高温泉→白出沢出合（奥穂高登山口）→滝谷出合→槍平小屋→千丈分岐点→飛騨乗越→槍ヶ岳山荘→槍ヶ岳→槍ヶ岳山荘（泊）。

【二日目】槍ヶ岳山荘→千丈乗越→千丈分岐点→槍平小屋→滝谷出合→白出沢出合（奥穂高登山口）→新穂高温泉

というルートの山行になりました。

大阪を出発した六月二十五日、名神高速の彦根付近で、ふと登山靴を積んでないことに気付き、家内に電話をして確認したところ、案の定忘れていました。

行きがけでしたが、何かの虫の知らせか、今回の山行は止めた方がいいのか、ということも頭に過りましたが、私なりにもっと慎重にという暗示だと受け止めて、靴は新しいもの買うことにして、大垣インターで降車して、近くのスポーツデポにて新しい靴を購入しました。

新しい靴は、ソールの強度が少し弱いことと、履き慣れないことでの靴擦れが心配でしたが、結果的には何の問題も無く、スムーズな山行になりました。

その後、時間にも余裕があったことも

あり、一般道を一五六号線、一五八号線とゆっくり進み、平湯温泉「ひらゆの森」という温泉施設で温泉につかって、夕食もそこで、名物の朴葉みそと飛騨牛の定食を食べ、翌日に備えました。

この施設は、昨年は来ませんでしたが、穂高に来た時はほぼ毎回利用しています。一昨年までは入浴料が五〇〇円で、五ヶ所の露天風呂とサウナも入れますので、この辺りではかなり格安で、いつも満員の施設です。今回二年ぶりに来て入浴すると、さすがにコロナの影響なんだろうとは思いますが、入浴料が七〇〇円と、四割も値上げになっていました。他の日帰り入浴場施設との兼ね合いで、横並びの価格に変更した模様です。

施設を出発して、二十二時頃には登山口の駐車場に到着しました。さすがに平日だったこともあり、駐車場はガラガラ状態で、登山口の一番近くに駐車することができましたので、そこに停めて仮眠しました。

二時頃になると、二組のグループが出

発していきました。軽めの荷物からすると、日帰りで槍ヶ岳の往復をしようという猛者たちのようです。

その内の一組のグループの四名（男二人、女二人）とは、午前十時半頃、槍ヶ岳山頂直下の千丈沢乗越分岐点で、彼らが下山時に休憩しているところに、私が登っていって、すれ違いに挨拶を交わしました。

私は四時に出発して、六時間半掛かったところですが、彼らは既に山頂まで登ってから降りてきていたのですから、その山行のスピードには、脱帽しかありません。

今回のこのコースは、蒲田川の支流が五本あり、増水すると川を渡れないので、新穂高温泉ターミナルで、その確認と登山届を提出して出発しました。

最短で登れる人気のコースですが、上高地～槍沢ルートよりも登る人が少ないのと、うまくいけば駐車場も無料で、バスの交通費のコストも削減されて、コスパのいい登山ルートです。

槍ケ岳への登山口を出発

登山口から蒲田川の未舗装の右俣林道のゆるやかな登り道を、新穂高平小屋、奥穂高岳の登り口・白出沢出合を過ぎてふと見上げると、槍ヶ岳の穂先が見えて、何とかこのまま天気がもって欲しいと思いながら、滝谷の出会い手前で支流を一つ越えて到着しました。

まだまだ足取りは順調で、さらに槍平小屋まで支流を二つ越えて到着しました。

登山口の出発時間にもよりますが、ここに宿泊して、次の日に軽い荷物だけで槍ヶ岳の往復をするのが一般的なルートになっているようです。

朝御飯のために休憩し、そこからは少し登ると最後の水飲み場があり、千丈沢分岐までは森林限界地帯で、お花畑を見ながら振り返ると、笠が岳や双六岳等が見え、それらを眺めながらの山行です。

槍平小屋からはかなりの急登で、高度差も二四〇〇メートル～三〇〇〇メートルに上がるところを歩きますので、水分と塩分補給・摂取等をまめにしていたのですが、何故か足の太ももが両足とも痙ってきましたので、日帰りグループと挨拶を交わした千丈分岐点からは、高度の加減で心拍数も上がってきて、足取りも重く、休み休みでやっと飛騨乗越の稜線にたどり着きました。

ガスってはいたのですが、槍ヶ岳や前方には蝶ヶ岳、常念等の表銀座の山々の景色が見え、ホッと一息つくと、登ってきて良かったと思いました。

十分ほど歩くと槍ヶ岳山荘に到着。早速宿泊の用紙に記入し、山小屋のスタッ

フを呼びますと、いきなり、

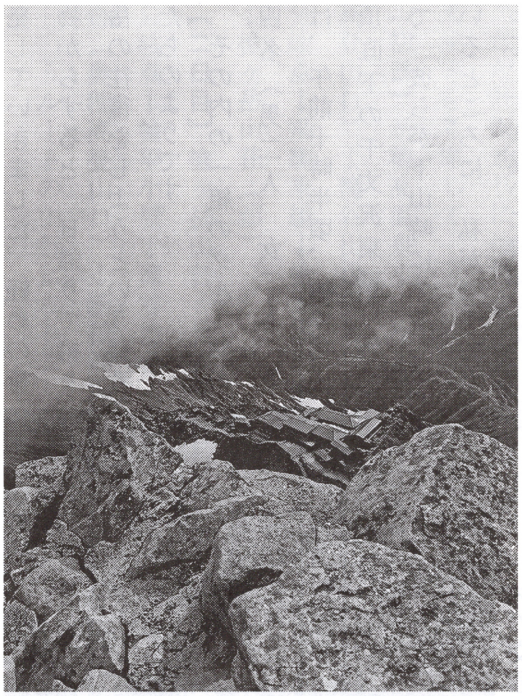
「予約は取りましたか？このあたりの山小屋は完全予約になっていて予約のない方には泊まっていただけませんよ。」

「登山口から電話一本でいいんですよ。」

「今回は泊めますから。」

と、矢継ぎ早に素っ気ない説明がありました。

その話し方に少し苛立ったこともあって、散心のためお題目を唱えながら聞きましたが、聞き終えてから、



槍ケ岳山頂から、眼下に槍ヶ岳山荘を望む

「連絡しなかった私がいけないのですが、今回は泊めますから、という言い方は改めた方がいいですよ。そこは、本来ならば完全予約となっていますが、本日は部屋が空いているので泊まれます。」

くらいに言われたら、私としては、何とも気持ちいい山小屋だろう、と記憶に留められるのになあ、とお話したところ、そこからは急に態度が変わって、あれこれと気遣っていただきました。

山小屋内の様子は、英語表記も多くなっていて、休憩室での自炊の食事は、欧米の方が五人ほど食事していました。

外国の方が増えると、日本のマナーも通じないので、口調もそういった日本でいう、上からの口調になるのでしょうか、それとも私が中国人か韓国人に見えたのかもしれません。

ただグローバル社会となって、外国人を引き受けていると、今回のＬＧＢＴ法案のように、言語や法律、ルール問題や日本の伝統文化も破壊され、欧米諸国の同調圧力で、様々に複雑になっていくのだろうかと思いました。

それどころか、日本では山小屋は避難小屋という伝統があり、遭難させないためにも、来る者拒まず、という伝統も忘れ去られてしまったのだろうかという気がしました。

コロナ禍以降は、三密ということで良い意味でも悪い意味でも、個人主義が一気に主流となって、他人はもとより親戚縁者との関係も、希薄化が進んでいるように感じます。

少々脱線しましたが。当日は宿泊者がガラガラで、「常念」という二階の一番奥の部屋に案内していただきました。部屋の名前の通り、窓から真っ正面に常念岳が見える、素晴らしい景観の部屋を用意していただいたようです。

この山小屋は、最大収容人数六〇〇人だそうですが、当日の宿泊者は、私がた

った一人だけだったことを、付け加えておきます。

部屋で荷物を少し片付けて、仮眠をとったりして体力も回復してきたので、午後三時頃から外のテラスに出て、槍の穂先にガスが掛かったり無くなったりしているのを見ながら、晴れるタイミングを見計らって、いざ山頂目指して登っていきました。

二十分程度の急登をよじ登り、最後の二カ所の階段を登って、難なく山頂に到着することができました。

山頂は、無風状態で、まるで誰もいない山頂を独り占めしているという、夢のような時間となりましたが、晴れたり曇ったりの天候で、ガスが掛かったり無くなったりを繰り返していましたが、その合間に見える立山連峰から裏銀座の山々、表銀座の山々、穂高連峰、乗鞍岳等が、なんとも幻想的で、改めて登ってきて良かったと、つくづく思いました。

しばし槍ケ岳山頂を独り占め

当日は、月曜日の平日だったこともありますが、こんなに人がいない槍ヶ岳を、自分一人で堪能できるとは夢にも思っていませんでしたので、これに味を占めて、人がいない時に登ることが病み付きになりそうな気がしました。

そんなことを思っていたところに、山頂にトレランの人一人が上って来ました。

聞けば、トランスジャパンアルプスレース大会の選考レースの練習のために、安曇野市の三股駐車場から蝶ヶ岳、横尾、槍沢ルートで、槍ヶ岳に登ってきたとのことで、コースタイムは六時間十分だったとのことでした。

既に十六時を過ぎていたので、二十一時頃には戻れる予定だとの話でした。

大会の話からいろいろ聞いたのですが、特に食料について訪ねると、その日は大きめのおにぎり三個、チューブ式栄養剤、水は基本的に沢の水でカバーしているそうで、足が痙ったりしないのか聞くと、ナッツ類にしてからは十分カバーできている、との話が聞け、これは私にも参考になる話だと思いました。

また、今年初めてのアルプスへの登山で、天気を心配しながら来ましたが、やはりここの景色は最高だ、と言いながら、下っていかれました。

その後も山頂の独り占めを楽しんで、十七時半に小屋に到着した後、広い食事会場で一人という、何とも贅沢な晩餐のひとときとなりました。

夕食後、しばし談話室で本を見て時間を潰しながら、二十時頃には床について熟睡すると、午前二時頃一度目が覚めた

ので外を見ると、窓に雨粒が付いていましたので、今日は雨の山行か、と憂鬱に思いつつ、再び寝て四時頃起床し、雨対策の準備をして、五時十五分頃、小屋を出発し、下山の途につきました。

下り始めてもまだ小雨で、風もなかったので、少し迂回して双六方向に行こうと予定を変更し、西鎌尾根を双六岳方向に向かい、千丈乗越まで味わい、千丈沢分岐まで下って、そこからは前日と同じ、槍平小屋、滝谷出会、白出沢手合、新穂高小屋、新穂高登山口のルートで下山しましたが、千丈乗越から千丈沢分岐までが急坂で、雨のガレ場ということもあって岩も滑りやすかったので、慎重に一足毎に確認しながらの下山となりましたが、やっとの思いで千丈沢に着きました。

一息ついた後、鍋平小屋～滝谷出会までは、基本的にはゴツゴツした河原の岩のような岩稜地帯で、登っている時には余り感じなかったのですが、雨で岩が湿っている下りの歩きにくさには、心と身体のアンバランスが如実に現れて、早く足を置きたいという焦る気持ちと、迂闊に置くと靴が滑ることも考えられるので、一歩一歩に集中して、歩く際のセルフコントロールの難しさを痛感しました。

年齢にもよるのでしょうが、今まで簡単にできていたことが、できなくなるもどかしさを感じざるを得ませんでした。私だけなのかもしれませんが、面白いことに、初めは歩きにくいなと思って慎重にしていても、慣れてくると、心の中でいろいろ違うことを考えてしまい、足下や頭の上などが疎かになるのか、滑ったり頭を木の枝に打ったりしました。そういうことは、意外と起こりえないと思っているところで発生しているということを発見しました。

山頂からは、３６０度の眺望が広がっている

人間も、経験的にも危険は本能で察知するのだと思いますが、慣れてくるとなかなか集中力を持続させることは難しくなるので、逆に慣れてきた時こそ、何事にも集中することに重きを置くことが肝心なのかもしれないということは、登山だけでなく、他のことにも通ずるように思いました。

そんなことを思いながら下っていると、気がついたら雨も止んでいて、滝谷出会で、外国人二人連れの登山者と、この山行二回目の出会いとなり、互いに挨拶して別れ、そして下山口へ到着し、その後、無事帰阪しました。

今回のルートの全長距離は、往復で二十八・八キロメートルでしたが、久しぶりに楽しい山行になりました。

本書には、「小説野性時代」（二〇一八年十一月号～二十年八月号）に「これで暮らす」と題して連載した二十編と新たに書き下ろした一遍が収録されている。

一九五四年生れの著者が、シニア世代となり、体力の衰えを感じつつも、「御飯を小鍋で炊く」「掃除をシンプルに」「花を飾る」など、日々の生活を少しでも豊かにするための工夫を綴っている。

けなげな著者の工夫ぶりを、同じような時代を過ごしてきた自分と重ね、何度も相づちを打ちつつ、一気に読み終えた。

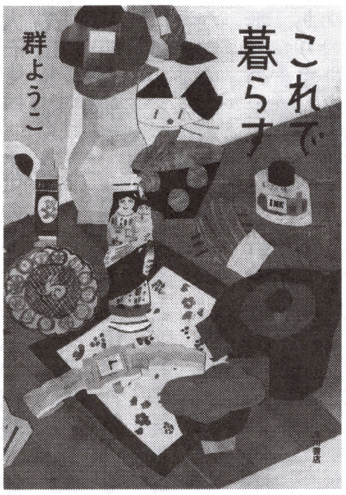
その一つ、「昔ながらの文房具」は、万年筆と消しゴムにまつわる話題。

著者は、一九八四年、「午前零時の玄米パン」で作家デビューしているが、その当時の原稿作成について、

「鉛筆か万年筆で手書きだったので、文章の入れ替えがあったりすると、本当に大変だった。時間があれば清書をするが、だいたいが締め切りギリギリまで遊んで、お尻に火がついてあわてて書くということを繰り返していたので、ほとんど下書きに近いものを、編集者に渡すことも多かった。」

読書案内

松田銘道



群ようこ著

『これで暮らす』

角川書店

定価一五四〇円

と振り返っている。しかし、その後、画期的な変化が訪れる。ワードプロセッサーが普及し、文章の移動、挿入、削除が簡単にできるようになり、原稿もファックスで送れるようになった。そのことだけでも驚いていたのに、

「まさかパーソナルコンピュータというものが世の中に登場し、原稿を書いて簡単な操作をすればそのまま編集者に原稿が送れる日が来るなんて、想像もしていなかった。」

と綴っているが、著者と同じような想いを懐く人は多いと思う。

それでも、著者はスケジュールの管理、覚書はすべて手書きにして、手で書くという作業を生活に取り入れ、鉛筆で書いて間違えたら消しゴムで消す、そのちょっとした面倒なことを楽しんでいるという。そのような自分を、

「若い人に比べて残りの時間は明らかに少ないのに、時間がかかることが楽しくなってきたなんて、不思議なものだと自分でも首を傾げているのである。」

と不思議がっているが、これもシニア世代を楽しく過ごす工夫の一つ。

【紀行】

聖跡巡り〔2〕

槻木地区　井元恵子

三日目。先ずは、日興上人様開山の大石寺へ。

日興上人様が、上野の地頭の南条時光公の寄進により、富士上野・大石が原に移り、「法華堂」（庵室）を開創したのが、大石寺の始まりです。

大石寺は、子供の頃に何度か、両親と登山していましたので、懐かしく感じました。

三門の前で、綺麗な富士山と一緒に写真に収め、三門をくぐると、私の一番好きな塔中の石畳の道です。少し歩くと、一番奥の左手に、一軒だけ門の朱い塔中がありました。

塔中の首坊だそうで、江戸時代には代官坊と称され、その格式を表すものとして、門が朱色に塗られているそうです。そこには「寂日坊」と書いてありました。

日興上人の弟子日華師が寂日房で、御書にも大聖人様が五十八歳の時に、身延にて寂日房を使者として、どなたかにお手紙を書かれた「寂日房御書」があります。

大石寺三門（井上真理さんに撮っていただきました）

次に、塔中を通り過ぎた先を左に進むと客殿、まっすぐ行くと御影堂、さらにその奥にあるのが奉安堂です。

奉安堂は、初めて見ましたが、馴染みがないのも当たり前です。子供の頃登山した時は正本堂のあったところに建てられた、日顕師によって壊された正本堂があったところでした。奉安堂の前で、方便品と自我偈、題目をあげ、少し散策して大石寺を出ました。

次は、南条時光公墓所です。下条妙蓮寺の南西に位置していて、真理さんの記憶を元に車を走らせます。

下条妙蓮寺とは、南条時光公が、亡くなった奥さんのために建立したお寺です。お寺の中には入らず、南条時光公の墓所の場所を聞き探しました。グルグル回って、やっと着きました。

お墓は三つあり、左右がご両親、真ん中が南条時光公のお墓で、その真ん中の墓石のすぐ後ろに、古い墓石がありました。きっと、その墓石が古くからのお墓ではないか、と推測しました。

真理さんが用意してくれたお供え、樒、

お線香にロウソク、鈴までも。準備万端でした。私は何も持ってこず、すみません……。

その日は、とても風が強く、何とかロウソクと線香の火を点け、方便品と自我偈、お題目をあげました。

次は、西山本門寺です。行く道中にカフェがあり、その中に雑貨店があるのを見つけ、ちょっと寄り道。

少し買い物をして、支払いをしようとしたその時、免許証が無いことに気づき、慌てて南条時光墓所に引き返し、探しましたが見つからず、立ち寄ったカフェと大石寺にも連絡し、もし見つかった時は電話をお願いしました。見つからないのは仕方が無いので、少し遅れましたが、気を取り直して西山本門寺へ。

西山本門寺は、富士五山と呼ばれている五ヵ寺の内の一つです。日興上人様の弟子、日代上人が開山したといわれています。

総門から入ればよくわかったのかも知れませんが、昔の横から入るわかりにくい入り口から入ろうとしたので、真理さんが言わなければ、通り過ぎていたと思います。

細い山の中の道をドンドン進んでいくと、開けた所に出ました。そこが本門寺です。本当に山の中にあり、広さは三百六十町歩だそうです。町歩といってもわかりにくいと思って調べた所、一町歩は九九一七・三六平方メートル。ん？わからん。甲子園のグラウンドが一万三千平方メートルです。皆さん、計算してみてください。

本堂の裏には、織田信長の首塚があり、首を埋めた後に柊を植えたとの記録が残されていて、その柊が樹齢五百年～六百年だといわれ、計算が合うのだそう。私は信長ファンなので、まさかの首塚に喜びました。

次は、北山本門寺です。重須談所跡です。日興上人様が晩年三十六年を過ごした所です。日興上人様のお墓もありました。この北山本門寺も富士五山の一つです。

日興上人様は、大石寺を日目上人様に譲られた後、重須地頭の石川新兵衛宗忠の寄進により、重須談所に移られました。石川新兵衛宗忠の妻は、南条時光公の姉で、大聖人様から「重須殿女房」と呼ばれた人物です。

重須に移られて約七年経った頃に、嫡子の石川孫三郎能忠、南条時光公及び小泉・上野の法華衆の外護を得て、重須本門寺を開創したのが始まりとされているそうです。

それから二百年以上経て、武田信玄の駿河侵出により焼失した、との記録が残っているそうです。

江戸時代には六万坪だった土地が、今は一万六千三百坪。それでも広いですね。

阪神ファンの私は、またまた甲子園の広さと比較しますが、甲子園のグラウンドは四千坪弱ですので、とっても広いですね。

まぁ、広いといえば、大石寺は二十一万一千七百五十坪なので、比較にならないほど大石寺は広いですね。

話を元に戻します。北山本門寺の三門をくぐり、本堂を通り抜け、右奥に進みますと墓地があり、その奥に日興上人様のお墓がありました（※五月号の『恵日』に、日興の墳墓はおそらく寛永二十

年前後に造立したのだろうとの記載がありました）。この重須に、八十八歳までいらっしゃいました。

次は、実相寺です。元々このお寺は、天台宗のお寺で、平安時代の入唐八家の一人・円珍が、唐より招来した一切経を格護しており、大聖人様が三十六歳の時に訪れて経蔵に入り、一切経を閲読し、「立正安国論」を著したとされています。その一切経蔵は、本堂のまたその上にあり、本堂まで百四段の階段を上り、墓地の横を上り、一切経蔵の階段を四十段近く上った所にありました。さすがに息は切れました。

日興上人の墓（北山本門寺）

経蔵は、滅多に開くことはありませんが、下まで降りた時にお寺の管理の方に、中の写真を見せていただきました。

表現力の乏しい私に、その写真はどうだったか説明する術はありませんので、ご理解ください。ただ朱色と金色の棚にお経本が並んでいて綺麗でした。

境内には、珍しい「御衣黄桜（ぎょいこうざくら）」という名前の、黄緑色の桜が満開でした。

実相寺は、岩本山の麓から中腹にあり、ハイキングコースもありました。その管理の方に、岩本山に登ったら富士山が綺麗に見えると聞き、車で上がってみました。途中の道からも、とても綺麗な富士山でした。

次は、厚原本照寺です。熱原の法難ゆかりのお寺です。

本照寺は、住宅地の中にあり、こじんまりしたお寺でした。熱原三烈士のお墓がありましたが、夕暮れで、写真を撮ってもよくわからないものになっていました。残念。三烈士のお墓にお参りして、富士市をあとにしました。

実相寺一切経蔵

そうそう、免許証ですが、大石寺にありました。本当に良かったです。

この日は、次の日のことを考え、千葉県幕張まで行き、泊まりました。

四日目。まず午前中は、中山法華経寺です。

富木常忍氏と太田乗明氏の屋敷跡で、富木常忍邸跡に法華堂を、太田乗明邸跡に本妙寺を建立。当初は、この両寺が並び立って一寺を構成していたようです。

その後、この両寺を合体して法華経寺と名乗るのは、戦国時代の一五四五年以後のことです。

私たちは、駐車場から入りましたので、総門より一番奥から、逆向きに歩いて行

きました。いきなり目に入ったのが、鬼子母神と大きく書かれた大きなお堂でした。鬼子母神をお祭りしていました。

それを見た真理さんが、

「富木さんも草葉の陰で泣いてんで」と言ったので笑ってしまい、本当にそうだなと思いました。

本堂は、中には入れますが改修中でした。境内には、銅造の釈迦座像（中山大仏）や五重塔、祖師堂、法華堂などがありましたが、富木常忍氏のお墓（奥之院常修堂）は分かりませんでした。残念。そこから三門に向かって歩くと、お食事処や坊が並んでいます。

その中に、大荒行堂というのがあり、荒行堂日課の看板がありました。二時五十分起床・三時水行・四時朝課・五時三十分朝食粥座・六時水行……と、三時間おきに水行、合間の時間には法華経読誦三昧行と書いてあり、今でも毎年十一月一日から二月十日まで行っているようです。秋から真冬にかけて行うんですね。考えただけでも辛そうですが、荒行は大聖人の法義からは外れた修行法で、日蓮正宗では認めていない修行だそうです。

そこから三門はすぐ側にあって、大聖人様の像が建ってました。総門はまだ先でしたが、総門には行かず引き返しました。

参道の店先に、里芋を蒸かした『きぬかつぎ』が美味しそうだったので、買って車の中で食べました。

中山法華経寺の裏手には、千葉県市川市で生涯の大半を過ごして亡くなった、東山魁夷の『東山魁夷記念館』がありました。芸術作品が好きな真理さんは、入場して鑑賞していました。

次に、午後は池上本門寺です。東京の大田区にあるため、千葉県から高速で移動しました。

池上兄弟の屋敷跡です。大聖人様が常陸国の湯治に向かう途中で、池上邸にて御入滅された所です。

総門の下に車を止め、結構な階段を上ります。この石段は、戦国時代の武将、豊臣秀吉の家臣の加藤清正の寄進によって造営されたと伝えられていて、法華経宝塔品の偈文九十六文字にちなみ、九十六段に構築され、別称を「此経難持坂」といわれると、「池上本門寺の石段」という看板に書いてありました。

階段を上ると、右手に大聖人様の説法像があり、真っ直ぐ進むと仁王門が見えてきます。仁王門をくぐって正面に大堂があり、左側に行くと、左手に鐘楼や経蔵があり、その先には売店・お休み処があります。ここのお蕎麦がとても美味しかったです。

大堂の裏手になる道を紅葉坂といい、この紅葉坂を渡ってさらに真っ直ぐ行く

大聖人臨終の間がある大坊本行寺

と、本殿があるようですが、そこまでは行っていません。

大堂を背中に、紅葉坂を左に曲がって進むと、大坊坂という長い階段の坂になっていて、そこを下りると大坊本行寺に出ます。

その階段の途中に、「多宝塔」という朱くて大きな塔がありました。大聖人様の御遺体を荼毘に付した荼毘所でした。その前で方便品と自我偈、お題目をあげました。

大坊坂の階段を上がって戻り、紅葉坂をまっすぐ行ったところが本門寺の墓地で、沢山の墓地がありました。そこの墓地には、徳川家の正室や側室（お万の方など）のお墓が沢山ありました。

そこにいた案内人らしき人（毎日のように来てるので詳しいらしい）が、色々説明してくださり、徳川家の女性は池上本門寺に、男性は浄土宗の大本山増上寺に埋葬されると話していました。でも、皆が全員そうなっているようでもないみたいです。他には、ホテルオークラの創業者のお墓や力道山のお墓がありました。

真理さんが、その方に桜の木が（お会式桜）どこにあるかを聞いてくれ、その桜を探すために墓地をあとにしました。

来た道を戻り、紅葉坂を通り抜け、先ほどの荼毘所があった大坊坂の階段を最後まで、大坊本行寺（池上宗仲邸跡）まで下りていきますと、ありました！。お会式桜と臨終の間！。真理さんが探してくれなければ、長い階段なので、私だけでは諦めてました。臨終の間（本行寺本堂）に上がり様子をうかがっていると、大聖人がご入滅された時の様子を図した「日蓮聖人涅槃図」というのがあり、販売しているとのことで、少々高かったですが、真理さんが悩むことなく「買うわ！」というので、「私も買おう！」と、真理さんの判断に乗っかりました。

あまりよく分かってない私は、涅槃図に描かれている方々のことは半分もわかりませんが、買って良かったと思って、これから少しづつ勉強します。

ご覧になりたい方は、お寺に持っていきますので、お気軽にお声をお掛け下さいね。

販売している厳定院では、お若い僧侶が、丁寧に色々教えてくださりお世話になりました。

本門寺を出て、お土産に葛餅や胡麻のふりかけを買い、自宅にていただきました。美味しかったです。

次の日の四日目は、一旦聖跡巡りは中断し、お互いの行きたい所に行くための空き時間としたために、三日目の夜は、都内の両国国技館近くのホテルに泊まりました。

【葉月詠草】

〔和風〕

隣り家の　子等口ぐちに　挨拶を
教え込むらし　九官鳥に

朝まだき　鎮もりの中　始まりぬ
鍬入れ式の　白砂の音

恵日だより

案内・お知らせ

＊お盆棚経のご案内

新型コロナの流行のため三年にわたって中止していたお盆の棚経を、本年より再開いたします。

また、源立寺において十三日（日）のお講および十五日（火）に盂蘭盆会法要を執り行いますので、講員各位には、故精霊・先祖への報恩供養の心をもってご参詣下さい。

なお、本年初盆を向えられ、お盆のご回向を、各ご家庭または寺院にて奉修することを希望される方は、別途源立寺受付までお申し込みください。

＊盂蘭盆会の参詣について

ここ三年ほど、盂蘭盆会法要は、新型コロナ感染拡大予防のために、各地区別に分散して奉修しておりましたが、本年より例年に戻して、盂蘭盆会法要は八月十五日（火）に奉修されます。

また、十三日（日）のお講においても、お塔婆を立てご回向いたしますので、ご希望の方はご参詣ください。

法要参詣の際のマスク着用は、各自の判断といたしますので、ご自由にご参詣ください。なお、お塔婆の申し込みは、なるべく法要当日を避けて、事前のお申込みをお願いいたします。

また、秋のお彼岸のお塔婆も合わせて受け付けていますので、受付までお申し込みください。

＊各種行事の参詣について

本年より、龍口法難会は、例年通り九月の第二日曜（十日）のお講と十三日（水）のお講の二回奉修します。

講員各位には、ご都合の良い日にご参詣ください。

恵日のホームページを活用しましょう

昨年の法華講総会において、恵日のホームページの開設とその内容が紹介がされましたが、講員の皆様には活用いただいているでしょうか。

恵日のホームページを、源立寺の法華講員が使い方もわからないというのではお粗末な話ですので、是非ともご活用をいただきたいと思います。

◆恵日ホームページのアドレス：https://the-enichi.co/

※なお、八月二十七日(日)十時から、源立寺にて開催される夏期研修会において、スマホを用いた使い方を紹介しますので、多数のご参加をお願いいたします。

【訃　報】

〔大阪地区〕羽曳野市

孝真院妙美信女　七月十六日寂

俗名田嶋美智子之霊　行年八十一歳

この度、右の方がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

八月の行事

一　日（火）　午後二時　お経日

六　日（日）　午前九時　講中勤行会・幹事会

八日（火）～十五日（火）　お盆棚経

十三日（日）　午後一時　お講

十五日（月）　午後一時　盂蘭盆会

※九月号の継命・恵日発送（8月末）は、
『大阪』地区が担当です。
十月号の継命・恵日発送（9月末）は、
『北摂』地区が担当です。

【恵日俳壇】

海色の石鹸泡立て夏に入る　〔農婦〕

うたかたの愁ひの果てのソーダ水　〔森秀之〕

梅雨晴れや一歩一歩と槍ヶ岳

登山とは何かと教える槍ヶ岳

雲海や晴れて見ゆる槍ヶ岳　〔故吉田裕〕

走り梅雨膳所に芭蕉の細き杖

紫蘇の葉に夕日のとどく厨かな

恵日

令和五年八月号　通巻三四三号
令和五年八月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道

発行　恵日編集室

〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内

TEL（〇七二）七五一―三一三五

E-Mail　kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料（含送料）　年間二〇〇〇円

〒振替　加入者名　恵日編集室会計

口座番号　01380-2-126649

恵日　八月号　通巻三四三号　令和五年八月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内　恵日編集室　購読料（含送料）　年間二〇〇〇円